

# “queer”の裏側と「無関心な大衆」の パラドックス

— ジョイスの「姉妹たち」再考 —

金井嘉彦

ジェイムズ・ジョイス (James Joyce) の最初の短編集となる『ダブリナーズ』 (*Dubliners*) は、難航した出版社との長い交渉の末 1914 年ようやく刊行された。本 2014 年は『ダブリナーズ』出版 100 年にあたる。本としての出版は 1914 年だが、個々の短篇の実際の執筆は、早いもので 1904 年から行われ、遅いものでも 1907 年までにほぼ終わっている。ということは、1882 年生まれの作者がおおよそ 22 歳から 25 歳の間に書いた作品となるわけだが、そこには 20 代前半の青年が書いたとは容易には信じがたい洗練された技法が見られる。抑えられ、自己主張することのないその静かな技巧ゆえに自然主義的な小説と見られることもある『ダブリナーズ』であるが、この小説の本質はそこにとどまらない。本論は『ダブリナーズ』の最初の短篇「姉妹たち」 (“The Sisters”) の読み直しを行い、この作品中で使われる “queer” という語を手がかりに、ジョイスがこの作品の中に裏の意味の世界を切り開いていくのを見る。

## 『ダブリナーズ』の意図と構成

まずはこの短編集の意図と構成をおおまかに確認しておこう。ジョイスは 1906 年 5 月に出版社のグラント・リチャーズ (Grant Richards) に宛てた手紙の中で、『ダブリナーズ』の意図と構成を次のように説明している。

私の意図は自国のモラル史の一章を書くことにありました。ダブリンを場面に設定にしたのは、この街が私には麻痺の中心 (“centre of paralysis”) であるよ

うに見えたからです。私はそれを無関心な大衆に対し、四つの相、すなわち少年期、青年期、成人期、社会生活のもとに示そうとしました。物語はこの順番に並べられています。そのほとんどを周到に削った野卑の文体で (“a style of scrupulous meanness”) 描いたときの信念は、その表現を変えたり、ましてやそこに見えたり聞こえたことを歪めようとする人は非常に大胆であるというものでした。(Letters, II, 134)

引用されることの多いこの手紙でジョイスが「モラル史の一章」を書こうとしたというのは、ジョイスがアイルランドのモラルの現状に問題があると考え、そのことを訴えようとしていることを指す。それは、彼が他の手紙で用いた言葉を借りるなら、「我が国の精神的解放の一步」をもたらす試みである (Letters, I, 62-63)。ジョイス読者やジョイス研究者であればなじみの深い言葉であるにしても、一般の読者からすれば違和感を覚えるに違いない「麻痺」(“paralysis”)は、その問題あるモラルの状態を指すメタファーとなるが、病気の、しかもその深刻な病名は<sup>(1)</sup>、アイルランドが重篤な状態にあることを暗示し、その違和感を覚えさせる言葉遣いによって、早急にその治療が必要であることを訴える。「四つの相」とは、『ダブリナーズ』が四つのグループから構成されていることを示す。ジョイスの言葉にあるように、最初の三篇 (“The Sisters”, “Encounter”, “Araby”)は、実際子供を主人公とする物語で、続く四篇 (“Eveline”, “After the Race”, “Two Gallants”, “The Boarding House”)は、まだ結婚に至っていないという意味では青年期の主人公の物語といえそうであるが、“The Boarding House”のドーラン (Doran) が34か35歳と描かれていることからすれば、青年期という言葉が広い意味で使われていることがわかる。続く三篇 (“A Little Cloud”, “Counterparts”, “Clay”)では最初の二篇が結婚をし子供もいる男性を描き、三つめの作品は結婚することなく人生の終わりを迎えるであろう女性を描く。これまでの十篇が、異なった年齢層に属する主人公を配置することにより、ジョイスにとっては脅迫観念的な関心事であったといってよい、人間の発達段階をダブリンという街を舞台に表しているのに対し、最後の四篇はそれとは若干性質の異なるものを描く。そこでは、主人公の個人的な領域より、より社会的な関係に重点が置かれ、そのことをジョイスは「社会生活」(“public life”)という名で表現している。ジョイスが自身の文体に与えた “a style of scrupulous meanness” という呼び名は、曖昧な表現である。“scrupulous”は、「徹底的な、周到な」の意で取るにしても、“meanness”は「けちであること」、「野卑」双方の意

味で取れる<sup>(2)</sup>。前者で取るならば、余計なことは省き、必要限度ぎりぎりにまで抑えた表現とすることにより、逆に表現の正確さや的確さを表す文体、意味を与えずに、読者に意味を考えさせる足りなさを織り込むことによって逆に意味を豊かにする文体を指すことになる。後者で取るならば、ジョイスが他の手紙で言及しているように、舞台となっている場所の「灰だめや枯れた草やくずの匂い」(*Letters*, I, 63-64)が、そのまま読者の前に現前するような文体を指すことになる。あるいはまた、“scrupulous”を原義にそって「良心において」とし、“meanness”を「けちであること」と取るならば、容赦なく現実を突きつける文体を指すことになろう。手紙の最後で触れているのは、彼が用いる言葉への態度表明である。彼が選んだ言葉は真実であり、真実ゆえに変更されたり、歪められたりすることは許されないと信条の表明であり、そのような完璧な言葉を使うことができているとの自負の表明である。

## 物語

『ダブリナーズ』は「姉妹たち」と題された短篇で幕を開ける。この作品は、神秘主義者・詩人の A. E. ことジョージ・ラッセル (George Russell) の口利きで『アイリッシュ・ホームステッド』(*The Irish Homestead*) 紙 1904 年 8 月 13 日号に (ジョイスの名ではなくスティーヴン・ディーダラス [Stephenn Daedalus] のペンネームで) 掲載され、その後大幅に改稿された。

少年の視点で語られるこの物語は、自分が懇意にしていたジェイムズ・フリン (James Flynn) 神父の住む家を少年が夜中に見上げるところから始まる。三度目の発作があり、もう長くはないと聞いていたその神父がまだ生きているかどうかを、通夜の晩に二本のろうそくを死者の傍らに灯すアイルランドの風習から少年は判断しようとしている。まだろうそくは灯されておらず、したがって神父がまだ死んでいないと思っていたある晩、少年は彼の家によく出入りしていて、少年もちょっと前までは彼の話をおもしろがって聞いていた、コッター (Cotter) という人物の口から思いがけずその神父が死んだことを告げられ、なんだか裏切られたような気持ちになる。さらにはコッターからあのような人物と子供が仲良くするのは問題であるといわれ、少年は、口には出さないものの、気分を害する。その晩少年は夢を見る。その中で少年は神父の「灰色の」顔から逃げようとするが、どこに行っても神父の顔が待ちかまえていて逃れることができない。神父は少年になにか告白しよう

としている。

翌朝少年がコッターから聞いたことが本当かどうかを実際に神父の家に行って確かめると、神父が「1895年7月1日、享年65歳」で死亡したことを知らず張り紙が貼ってある。少年はいつもの部屋に入って行きたいと思うが、その勇気もなく、通りを、神父の死によってなにかから解放された気分を味わっていることに自分でも戸惑いながら歩いていく。おばと連れだって訪れた通夜でも、少年はまだ神父が死んだということを受け入れ切れておらず、神父が棺の中でいつものように笑っているような気がしてならない。弔間を終えたあとに話しをする中で、神父の様子がおかしくなったのは聖盃を壊してしまってからで、ある晩呼び出しがあったが見あたらなかった神父を探したところ、教会の告白室で自らを失ったように笑いながら座しているところを発見され、何かがおかしいということが皆に明らかになったと姉妹から聞くところで話は終わる。

### 意味の真空

このようなあらすじとするのであれば短篇「姉妹たち」ではたいしたことは起こっていないように見える。起こっていることといえば、少年が仲良くしていた神父が死に、その弔間に訪れることだけである。しかしこの短篇は決して単純な話とはいえない。むしろ意味のつかみづらい作品である。その一つの要因は不明な点が多めに多いことにある<sup>(3)</sup>。たとえば、少年と神父との関係はどのようなものであったのか？ おじがコッターに話すところによれば二人は親友で（“great friends” [40]）<sup>(4)</sup>、神父は少年に目をかけていた（“he had a great wish for him [the boy]” [41-42]）。神父は少年にラテン語の発音を教えたり、カトリックの教義について教えたりしていた。今ではすっかり飽きて、「退屈なじじいめ！」と心の中でののしるようになっているコッターについても、最初は醸造に関連したことを話してくれるおもしろい人と思っていたと少年自身がその気持ちを記録していることは（23-26）、少年が神父と仲良くなる前は、少年にとって神父がここのところ占めていた位置をおそらくコッターが占めていたことをうかがわせる<sup>(5)</sup>。“faints”や“worms”といった普通の意味で使われるのとは違う意味を持つ言葉をわざわざ例として挙げていることは、少年が今、これまで知っていたのとは違う意味で使われる言葉や、これまで知らなかった言葉や知識を求める気持ちに目覚めており、それを刺激する人物として神父がいたことをうかがわせる。『ダブリナーズ』の意味を象徴する言

葉として取り上げられることの多い“paralysis”, “gnomon”, “simony”といった言葉を、少年が自身を魅了する言葉として挙げていることからそれはわかる<sup>(6)</sup>。それであるにしてもなぜ少年は神父の死を確認しようと神父の家まで夜中に出かけていたのか？ 彼に対する敬意なのか？ そのような神父の死が明らかになった後なぜ少年はある種の解放感を覚えるのか？ その前に聞いたコッターの「自分の子だったらああいう男とたくさん話をするのはいただけないな……子供によくない」(“I wouldn't like children of mine...to have too much to say to a man like that...it's bad for children.” [48-49, 51], 省略と強調は筆者による)という言葉から、神父との関係に周囲の目からすればなにかしら好ましくない点があるかもしれない点を子供心にぼんやりと意識し始めたことの反動によるものなのか？ コッターが口にする「ああいう男」という表現の「ああいう」は何を指しているのか<sup>(7)</sup>？ コッターは別のところでも神父のことを「変わった」(“queer” [20])という言葉を用いて表現していることからすれば、神父のなにか好ましくない性質あるいは行動を念頭に置いているのだろう。それについておじ夫婦が異を唱えないことからすれば、それが単にコッターの独りよがりな判断なのではなく、ある程度共有された判断であることがうかがわれる。神父の姉妹も同じ言葉を使って神父の性格を表している。その判断をもたらす原因は何なのか？ 神父とつきあうことの妥当性に疑念を生じさせるものとしてなんらかの「事件」があったことが話題になっているが、それはどのようなものであるのか？ 聖盃を壊したというが、いつどのような状況においてなのか？ そのことが彼の聖職との関係で、あるいは彼個人のあり方との関係で持つ意味とはなんなのか？ 何が神父を追い詰めたのか？ それと「発作」とはどのように関係するのか？

これらの疑問ではあたかも足りないかのように、ジョイスは省略法を用いてさらに不明な点を付け加える。たとえば、コッターが少年と神父とのつきあいに反対をしている場面で、彼は、「いや、彼[神父]がまさに……だったということをいっているのではないが、どこか奇妙なところがあった……」(“No, I wouldn't say he [the priest] was exactly.....but there was something queer.....” [19-21], 省略は原著者)と神父について引っかけ点があるといいながら、それが実のところどういふところにあるのかをはっきりいわない。それは神父について(あるいは死者について)悪くいうことがはばかれたということなのかもしれないが、「彼にはなにか不気味なところがあった」(“there was something uncanny about him.” [20])と神父に問題があったことについては断言をする。そして「自分の考えをいわせて

もらうなら……」といって考えを述べようとするのだが、その言葉は途中で終わってしまう (I'll tell you my opinion...." [20-21], 省略は原著者)。続けて「それについては考えがある」となおも自分の意見をいいたげであるが、それをいい始めると「あれはああいう……特殊な事例の一つで……。だが……というのは難しい。」(“I have my own theory about it,” he said. “I think it was one of those...peculiar cases ... But it's hard to say....” [27-28], 省略は原著者) と最後まではっきりということができない。その後でも、「つまり子供にはよくないってことなんだ。俺の考えでは子供には同じ年頃の子と走りまわらせ、遊ばせておけばいい」(52-53) といったのに続けて、好ましくない状態を口にしようとするのだが、その言葉は再び「……」で消され、発せられることはない。それでもなお「そうだよな、ジャック？」(53) と少年のおじに同意を求めるのは、ある意味で笑いを誘う。

少年が後に「いい切られることなく終わった言葉」(“unfinished sentences” [73]) と表現するこの微妙な間はこのあとでも現れる。弔問が終わってイライザ (Eliza) と話をしているときに、神父の行動におかしなところが出てきたきっかけが聖盃であったとの説明がされるときも、「彼が壊した聖盃が……もちろんことの始まりで、みなはなにも入っていなかったからなんの問題もなかったというのだけれど、それでも……」(“It was that chalice he broke.... That was the beginning of it. Of course, they say it was all right, that it contained nothing, I mean. But still .....” [282-84], 省略は原著者) といった具合に語られない言葉が入る。神父のおかしな振る舞いの一つとして挙げられる告白室で神父が笑っていたときの様子も「目を見開いて自分に対して笑っているようで……もちろん、そのときです、彼になにかおかしいことが起こったとみなが考えるようになったのは……」(“Wide-awake and laughing-like to himself.... So then, of course, when they saw that, that made them think that there was something gone wrong with him.....” [305-07], 省略は原著者) と語られない言葉が入る。

このように「姉妹たち」には多すぎるほどのわからない点と、テキスト自体に語られない言葉がある。これらをテキストに開けられた穴と見るならば、ジョイスが描こうとしたのは語られていることそのものというより、そこには現れていないこと、語られていないことであるという言い方をした方がより適切かもしれないと思えてくる。

このように見るならば、『ダブリナーズ』を自然主義的な作品と読むのは、完全な間違いとはいいい切れなくとも、不十分なとらえ方であることがわかる。ジョイス

が「周到に削った野卑の文体」を用いて表そうとしたのは、真の姿、真理であったが、ジョイスはその真理を言葉そのもので表現するのではないことをここで確認しておかなくてはならない。上で見たようなテキストに穴を開ける作品の書き方によって、つまりはその文体によって、その真理を示唆し、あぶり出そうとしている。逆の言い方をすれば、真理は文体の効果としてあるということである。

少年がコッターとの話しの後でコッターが「いい切ることなく終えた言葉」について頭を悩ましたように、読者は語られていないことについて、数々の疑問について頭を悩ます。「自然は真空を嫌う」という言葉通り、語りにおける「真空」というべき穴は埋められなくてはならない。

『ダブリナーズ』解釈の歴史とはまさにそのような歴史であった。多くの批評家がこの作品の中の穴を埋めようと、細かな点も決して見逃そうとしない細かい読みを試みてきた。その結果としてしばしば起こったことは、細かな点にバランスを欠いた注意を払い、意味を盛り込んでしまう読みであり、シンボル・ハンティングであった。また『ダブリナーズ』の意味の取りづらさは、ジョイスの伝記への過剰な寄りかかりを生んだ。ジョイスの手紙に『ダブリナーズ』の手がかりを探し、*My Brother's Keeper* や *Dublin Diary* といったジョイスの弟が書いたジョイスの懐古伝を教祖の言葉の意味を伝える使徒伝のような扱いをすることになった。トーチアナ (Torchiana) のように『ダブリナーズ』の中に歴史的言及を見出そうとする読みや、マーゴット・ノリス (Margot Norris) が提唱するすべてを疑ってかかる読み方は、優れた解釈を数多く生み出してきたが、これらはいずれも『ダブリナーズ』の意味の真空がいかにかを逆に表すものといえよう。言い方を変えれば、これらは、ジョイスが仕組んだその真空に呼び寄せられたということだ。

### “queer”の裏側

「姉妹たち」には意味の真空があるだけではない。少年が懇意にしていた神父が死に、その弔問に行ったことを表向きのできごととするならば、それとは逆の、裏のできごとがここにはひっそりと隠し入れられている。それは通常の見え方とは逆であるゆえに、通常ではありえない意味の可能性であり、その意味ではそれが立ち現れることは不気味なことといえる。それはコッターが神父についていった「変わった」という言葉の裏側に現れ出る。

コッターは神父のことを「変わって」いたという。その認識は少年のおじ夫婦に



も程度はともかく共有され、同じ言葉を使うイライザが語る神父の死の経緯からも確認される。このナラティブで語られるのは、神父は変わった人で、変わっているがゆえに彼らの理解の及ばない生活・行動をし、その変わっていたことがその死に方とも関連していたということであろう。ここで、その「変わって」いたという神父の側からこの物語の中で語られている世界を見たらどのように見えるかを考えてみたらどうだろう？「変わっている」というのは、この作品に登場し、神父について語る人たちの側からの見方で、その人達の見方を「通常の」見方としたときに、神父の言動がそれとはずれていたことを示すものである。そうであるとすれば、その変わっているといわれている神父の側からすれば、今われわれが「通常」とした世界の方が「変わっている」ということになりはしないか？「変わっている」という言葉は、単にマジョリティーの側の世界観だけではなく、そこからは漏れ落ちる世界観が存在することを告げる言葉である。覇権的な見方の正しさを主張する言葉である一方で、それでは抑え込み、消すことのできない見方が同時に存在することを示す言葉である。「変わった」という言葉を使う人にとっては、その判断を下す時点で、自分たちの世界観に浸りそこから判断を下しているから、その言葉を使うときに、それとは違う世界観が存在することや、あるいは別の見方・考え方の方が正しいかもしれない可能性をその人が思い描くことはない。その意味で、「変わった」という言葉を使うことで、そこから違う世界観が漏れ出てくることは不気味なこととなる。

「変わった」という言葉はこうして鏡のような働きをすることになる<sup>(8)</sup>。しかしこの鏡は、ありのままの姿を映すというよりは、左右が逆転している以上に変化した世界を映し出す。「姉妹たち」において映し出される異世界とは、神父とキリストが重なり合う世界である。

少年が神父の家まで行って窓辺を見上げて、神父がまだ生きていのかどうかを確認する場面で、少年は神父から「自分はもうこの世界に長くはいない」(*I am not long for this world*) [7-8], イタリックスは原著者)と聞いていたことを思い出す。これが、フリッツ・セン (Fritz Senn) が指摘しているように、ヨハネの福音書第8章第23節「イエスは彼らにいわれた。『あなたたちは下からの者であるが、わたしは上からの者である。あなたたちはこの世からの者であるが、わたしはこの世の者ではない』」を受けているのであれば、神父はキリストと重なることになる (Senn, 66-67)。神父が自らをキリストに重ねているだけならば、それはまさしく「変わって」いたといわれている彼の性格を示すことになるだろう。しかし、この



言葉だけ取り上げるのであれば大げさに聞こえるこのキリストと神父との重なり合いは、他の表現やイメージと共鳴しながら前面に浮かび上がってくる。

たとえば、少年が弔問に訪れたときの部屋の描写を見てみるならば、少年が躊躇いつつも入っていった部屋は「夕暮れ時の金色の光に満ちて」(“suffused with dusky golden light” [171]) いる。この光は、弔問に行った夕方に、「日没後であったが、その家の西に面した窓は大きな雲の黄褐色気味の金色を映していた」(158-60) という一文により、西日によるものであることがわかるが、少年が部屋に入っていったときにその奥から金色の光が差し込む様子は、神々しいものの背後に描かれる後光のように見えるはずだ。

それよりももっとあからさまな例は、『アイリッシュ・ホームステッド』版の「姉妹たち」の冒頭に見出せる。そこでは、少年が神父の家を見に行くのは神の導きによると書かれている。少々長くなるがその書き出しの部分を確認しておこう。

私は三日続けてその時間にグレート・ブリテン通りにいた。あたかも神の導きに導かれたかのように。三晩私は光のついた窓を見て考えた。私にはそれが夜起こることがわかっていたように思えた。しかし私の足を導いた神の導きにもかかわらず、そしてまた私の目の敬虔な好奇心にもかかわらず、何も見つけることはなかった。いずれの晩もその四角い窓は同じように、ぼんやりと均一に照らされていた。それは、私が見る限りにおいては、ろうそくの灯りではなく、したがってそれはまだ起こっていなかった。(強調は筆者による)

原文では以下のようにになっている。

*Three nights in succession I had found myself in Great Britain-street at that hour, as if by Providence. Three nights also I had raised my eyes to that lighted square of window and speculated. I seemed to understand that it would occur at night. But in spite of the Providence that had led my feet, and in spite of the reverent curiosity of my eyes, I had discovered nothing. Each night the square was lighted in the same way, faintly and evenly. It was not the light of the candles, so far as I could see. Therefore, it had not yet occurred.* (強調は筆者による)<sup>(9)</sup>

二度繰り返される「神の導きによって」という言葉は、これから起こることが普通の死ではないこと、特殊な意味を持つ重要な出来事であることを示す。「神の導きによって」起こることが定められた、あるいはそうして起こることが間違いなく特定の人の目撃されなくてはならない性質のものである。神がその「導き」を少年に与えたのであれば、少年もまた普通の人ではないということになるだろう。神聖な出来事に加わるべき選ばれた者ということになる。少年にそれが起こる時間がわかっているように思えたのは、そして少年が「敬虔な好奇心」を向けるのはそのためである。しかしその後の文章にあるように、「神の導き」がありいつ起こるかもわかっていたように少年には思っていたにもかかわらず、待っていた出来事は三晩準備し待っていても起こらない。最終版ではそれは「夜ごと」(“night after night” [3])に変更される。このことが持つ意味は大きい。というのも、「神の導き」があったにもかかわらずなぜそれが起こらなかったのかを問題として提起するからである。考え得る可能性は二つしかない。一つは、「神の導き」と少年が呼んでいるものが間違いであった可能性であり、もう一つは、その「神の導き」を受ける少年の側に問題があった可能性である。前者に立って考えることは、神の正しさを問題にすることに等しく、したがってその神を否定するより大きな問題へと発展することになる。後者には、さらに二つの可能性がある。一つは少年が自身を神に従う者と思込むことに満足していただけである可能性である。実際は「神の導き」はなかったのだが、それをあったと思っている可能性である。これと類似した例は、「姉妹たち」の次の短篇「アラビー」(“Araby”)において、ロマンティックな恋の夢想に溺れるあまり、単におぼと買い物に行き荷物を運んでいるだけの行為を、異教徒の中を聖盃を守りながら進む英雄と重ねて思い描く少年に見つけられるだろう。これを発展させていくと、コッターが神父のことを「変わっている」としたのと同じように少年がそういうふうになりこむこと自体が「変わっている」可能性、つまりは少年の頭がおかしい可能性が出てくる。ここでは少年の側からの物言いになっているために、少年の正常さが問題になることはないが、その可能性がまったくないとはいえない。二つ目の可能性は、「導き」を与える「神」と少年との関係に問題があった可能性である。たとえば「神」がその少年を信じておらずに少年を試していた可能性や、あるいは少年の側に信じる気持ちが足りないところがあったために、どこかでその「導き」が歪められてしまった可能性が考えられる。実際最終版には、神父が発する「自分はもうこの世界に長くはいない」というキリストを思わせる言葉を、少年は神父から何度も聞いていたにもかかわらず、少年が「それを意

味のない言葉と考えていた」(“I had thought his words idle.” [8]) ことが記されている。

この少年の「導き」を受ける者としての適性の問題は、『アイリッシュ・ホームステッド』版では、コッターが来訪し神父の死を告げることを、「神の導き」があり、いつ起こるかもわかっていた少年の預言の実現と描くことで回避している。しかし、そのあからさまな描き方にも関わらず、ここにはなお危うい点が残されている。一つはその年齢的対比である。老人対少年という対比は、このような文脈においては、精神的・宗教的成熟と未熟という対比を含意することになる。少年の幼さは汚れなさという意味合いよりも足りなさを示唆する。これと関連するのは、二人の置かれている状況につきまとう光と闇の対比である。少年は闇の中で「光のついた窓を」見つめている。神父は、その命の灯火は消えようとしているにしても、光と共にある。神父は光の側において少年は暗い側にいる構図は、先ほど見た（しかし、物語的にはこの後起こる）神父の棺が置かれた部屋に少年が入るときにも繰り返されることとなる。死んだ神父を収める棺を背後から満たす金色の光が神々しいものであるとすると、少年が闇の中でみつめる光も単なる明かりではなくなるであろう。実際『アイリッシュ・ホームステッド』版冒頭では、原文を見るとよくわかるが、闇の中に四角く光る部分があり、その光はろうそくの火によるものではなかったという書き方がされている。われわれは、少年が外から神父が横たわる部屋の窓を見ているという想定の下でこの文を読むため、ろうそくの光でないと書かれていることを通夜に死者の枕元に置くろうそくの光ではないと読むが、その状況抜きに読むならば、ろうそくの火によるのでない光には、別の光、たとえば聖なるものが放つ光を読み取るだろう。そのような光が漏れる四角く光る部分というのも十分示唆に富み、これから「起こることがわかっている」こととは何か奇蹟に近いものの予感のように読めてくるだろう。神父が光と共にあるのに対し、少年は闇の中にいる。少年は闇の中にいるがゆえに光を見つめている (Walzl. 384, 387)。この光と闇は、二人のあり様を示すオブジェクティブ・コリラティブと読まなくてはならない。

最終版では宗教色を弱めると同時に、少年の足りなさをより前面に出す書き方に改められる。『アイリッシュ・ホームステッド』版の少年には「神の導き」があり、死がいつ起こるかもわかっていたように少年には思っていたが、最終版の少年にはそのようなものはもはや失われている。残っているのはその残滓ともいえる予感程度のものしかない。それでもなお彼はそれに突き動かされ、神父の死の訪れを確か

めに行く。しかしその死は、弱められた彼の予感程度のものではいつ起こるともわからない。それゆえに、少年は「夜ごと」見に行かなくてはならない。そしてまた、だからこそ、神父の死の知らせは、少年以外の人物からもたらされることとなる。神父の死を感知し目撃する役割を「退屈なじじい」と少年が見下すコッターに取られたことに対し、少年がショックを受けざるを得ないとすれば、それは少年の足りなさに起因する。

**“his life was, you might say, crossed.”**

もう一つ宗教的な意味合いを強く示唆する言葉で注目したいのは“cross”という言葉である。イライザはジェイムズには「神父の任は重すぎた」といい、それに続けて“his life was, you might say, crossed.” (272-74) という。この“crossed”という言葉の使い方には、意味の取りにくい部分があるが、それを聞いたおばが同意して「彼は失意の人でした」(“He was a disappointed man.” [275]) と受けていることから、“thwarted, afflicted”の意と解され(Jackson and McGinley 8)、「彼の人生は思うようにいかなかった」、その結果「苦しいものであった」と解釈される。しかし、“crossed”という言葉を発する前にイライザが文章を切り、“you might say”という言葉を入れていったん間を取ったことは、それに続けて言おうとする言葉を思い切って使ったこと、その言葉を使うことの意味の重さをイライザ自身が認識していたことを示している。そのことから考えると単に「うまくいかなかった」という意味でイライザが“crossed”という言葉を使ったとは考えにくい。

それはこの“cross”という言葉の現れ方にジョイスが注意を払っていたことから推測できる。マンセル社(Maunsell)からの『ダブリナーズ』の出版がいったんは決まり、校正刷りまでいったときには(1910年版)、“cross”という言葉はもう一カ所違う文脈で使われていた。それは、棺に入った神父に祈りを捧げ終えて、部屋を出るときにみなが行った行為を描くところで、そこでは「われわれは十字を切った」(“We crossed ourselves.”)と表記されていた。最終版では、文の意味は変わらないが、その中で使われる動詞“crossed”は別の“blessed”に置き換えられる(186)。同様の変更は神父の棺の中に遺体と共に納められるものにも起こる。『アイリッシュ・ホームステッド』版ではロザリオであったものが、その後いったんは十字架に変えられ、さらに最終版では聖盃へと変更される。これらの変更が意味するのは、イライザの台詞の中で、一回だけ使われる“cross”以外に、この短篇の中に

同じ語が出ないようにするため、読者の意識を分散させないためと考えられる。それはつまりこの語には特別な意味が込められていたということである。

この“crossed”という言葉は、何よりもまず cross にかけられた人物としてのキリストを想起させる。それはこれまで見てきた神父に重ね合わされたキリストのイメージと連動するものである<sup>(10)</sup>。実際 OED を参照するならば、動詞の意味として最初に挙げられているのは、“To crucify”である。現代においてそのような使い方は見られないにしても、名詞の「十字架」から、動詞としての「十字架にかける」を連想することは難しいことではない。それはほかの箇所でもマラプロピズムの名手であることが示されているイライザであれば、なおさらといえよう。

神父が“cross”されたというその意味は、神父はキリストのように“cross”されたということであり、それにより彼女は両者を重ね合わせる。この点がまず第一に確認しておかなくてはならない点であるにしても、この言葉はそれにとどまらない役割をする。“cross”されたとするならば誰あるいは何によってなのかが当然のことながら問題となるからである。イライザがいう表向きの意味は、神父にはその役割が重すぎて、その任務に“cross”されたということであろう。しかしそこには、神父がなにかしらの不幸な目に合わなければならなかったことに対する義憤だけでなく、姉妹の不満が見て取れる。神父を支えるために自分たちが犠牲になったことに対する憤りが感じられる。イライザの言葉に出てくるように神父と二人の姉妹がアイリッシュタウンの出身であるとする(261)、彼らが貧しい家の出であったことがわかる。神父が神父となるために、家族は彼を支える必要があった。姉妹が結婚をしていないのはその代償の一部と考えられよう。少年の目にとまり気になるほどぼろい布の靴を履き、つぎはぎの跡が見えるスカートを身につける神父の妹ナニー(Nannie)が示すように、姉妹が貧しさに耐えながら神父を支えてきたことは間違いない。姉妹自身も、貧しかったが、できることはすべて行い、神父には不自由な思いをさせてこなかったといっている(223-25)。姉妹が払った犠牲も、神父が神父として職をまっとうできていたのであれば、報われたと感じられたであろう。だが神父が神父の職をきちんと勤めるどころか、この短篇で描かれているように何かしらの問題を起こし、おかしくなってしまったとしたならば、ジェームズが神父であることの誇りも経済的な基盤も奪われた、そしてまた彼を支えるために自分達の結婚の可能性も奪われたという意味で人並みの幸福も奪われた、姉妹にとっては、やり場のない不満だけが残ったことであろう。その口惜しい気持ちは“cross”という言葉を引き出したとしたら、“cross”されたのは、神父といいな

がら、実質は自分たち姉妹たちであるということになる。

イライザが神父について話すとき、彼女は何度か言い間違いをする。一つはすでに引用した、“The duties of the priesthood was too much for him.” (272-73) という、“crossed”という言葉を出す直前の言葉である。この文章の主語は“duties”であるから、本来であれば動詞は複数形の were とならなくてはならないところを、イライザは“was”と単数形で受ける。ラカン的な精神分析的見地から『ダブリナーズ』を読むレナード (Garry Leonard) は、これを単なる彼女の文法を知らない無知によるものとはせず、彼女が密かに思っていたことを口を滑らして露わにしまったと見ている。神父の死に際し様々な手配をしてくれた神父として彼女が名前を出すオルーク神父 (O'Rourke) が有能な神父であったのに対し、ジェイムズは残念ながら無能で、そんな無能な彼にとっては神父の職 priesthood 自体ががそもそも重すぎたのだと考えていたがゆえに、口を滑らせ priesthood を主語にした文にしてしまったというのだ (Leonard 42)。同様に、彼らが生まれた街アイリッシュタウンに姉妹を連れて車でもう一度帰りたいと神父がずっといていた話を紹介するとき、本来であればそのタイヤを“pneumatic”という言葉で表さねばならないところを“rheumatic wheels”といってしまうイライザの言い間違いを、(おそらくはリューマチで) 足の具合の悪いナニーのことを頭に置きながら、彼女の失望の端緒となったアイリッシュタウンに彼女は帰りたくなく、今更そのような車に乗って帰っても笑われるだけであるという気持ちがもたらした言い間違いと解釈をしている (Leonard 45-47)。この解釈は、上で述べた“cross”されたのは、実は神父ではなく姉妹であるという気持ちの表われであるとする解釈を支えてくれるだけでなく、もう一つ重要な点として、このような気持ちを抱く姉妹たちによって神父が“cross”される結果になることを示唆する。神父が姉妹に支えられてきたことは事実であるが、その裏にある気持ちによって神父はすでに“cross”されている。“cross”には「裏切る」という意味がある。

ここで思い出しておいてよいこととしては、『アイリッシュ・ホームステッド』版では“his life was, you might say, crossed.”という言葉が発していたのはおばであったが、最終版ではイライザに書き換えられている点である。これまで見てきた見方からすれば、この台詞を口にすべきはイライザであることは明らかであろう。

これと関連して興味深いのは神父と少年との関係である。少年がコッターに示した馬鹿にする気持ちに嘘はなかったであろう。この短篇で少年にはなぜか親がおらず、その経緯の説明もないまま、彼はおじとおばのもとにいる。その少年にとって



神父は、幾分気持ち悪さを覚えたことが事実であるにしても、彼の知性を開花させてくれる父親的な存在であったであろう。神父がFatherと呼ばれるのは普通のことであるが、そのFatherは少年にとってはそれだけではない意味を持っていたかもしれない(Walzl 410)。ゆえに少年は神父のことを悪くいうコッターに対し反発せずにはいられない。しかし彼はコッターにそのつきあいを批判されても、結局なものにもいわないことを選ぶ。それは神父の死を確かめた後に少年が取る妙な行動およびそれまでの態度と矛盾する気持ちへとつながるものと見ることができる。少年がいつもならする神父の家に入ることをしないこと、道路の陽の当たる側を選んで歩くことは、死者の側に立たない彼の姿勢を示すと考えてよいだろう。神父が死んで悲しい気持ちでいるはずの彼が、その予想とは裏腹に、悲しむ様子は一切見せず、劇場の広告など見ながら歩くこと、また自分でも理解できないある種の解放感を感じ混乱を覚えるのはそのためであろう。ここには、コッターとおじ夫婦との会話で、神父は問題ある人物と聞かされた少年が、これまで精神的な父と思ってきた神父に対し漠然と疑いの気持ちを持ち始め、その気持ちを心の中に浸透させていった様子を見て取ることができる。少年が夢の中で、逃れたいのに神父の顔につきまとわれるのは、少年が神父の顔を不気味と思い、棺の中にいる神父の顔がどう猛に見えるのは、彼にやましい気持ちがあるからと解釈することができる。神父が死んでもなお笑っているように思えるのは、自分の小賢しい立ち居振る舞いを見透かされた気持ちがあるからと解釈することができるであろう。

これに関連して興味深いのは、死者との対面を終え、階下に降りてきて話しをしているときに、姉妹に勧められたシェリーを少年が口にするタイミングである。少年は勧められたクリーム・ビスケットもシェリーも口にすることなく座っていたのだが、イライザが“crossed”という言葉を発したまさにそのタイミングでシェリーを口にする。このことは両者の間に結びつきがあることを強く暗示する。彼の行為は、神父が“cross”されたというイライザの言葉を、われわれがここまで見てきた、それが誰によって、どのように行われたかも含めて、認めるものであり、その解釈に加わる象徴的儀式といってもよいものである。“cross”にかける行為には、キリストの場合においてもそうであったように、裏切りがある。そこに少年も加わったことがここには示されている。シェリーは裏切りに対して支払われる報酬なのだ。



### 結語にかえて

「姉妹たち」で使われる“queer”という言葉の裏側には、キリストの影を背負った神父がいる。その神父はキリスト同様に十字架にかけられる。そもそも十字架にかけられる行為には、キリストの場合同様裏切りがある。「姉妹たち」が描くのは、神父を身を削りながら支えてきたはずの姉妹たちが、気持ちの上で彼に不満を持ち、その気持ちの中で実は彼に対して裏切りを行っていたことをあぶり出すことであった。そこには神父の「弟子」であったはずの少年も荷担する。この解釈は、「姉妹たち」と題された短篇であるにもかかわらず麻痺した神父の物語とする従来の読みを是正し、そこに決定的に欠けていた姉妹の行った行為の意味を少年の存在の意味も含めながら明らかにしてくれる。

“queer”という言葉の裏側に書き込まれたこのような物語は、場合によっては人間に裏切られたキリストがその恨みを述べるような予想もしない世界を垣間見させてくれる。だからといってこの短篇は、単純に姉妹たちの裏切りを暴き、神父を英雄化する物語とはならない。“queer”という言葉の表向きの意味が示す世界——そこでは神父は“queer”であり、麻痺し、否定されるべき存在である。そしてなによりもすでに不在である——と、意味の衝突を起こす。その衝突は、あたかも合わせ鏡のように、意味の乱反射を起こす。「姉妹たち」について意味の不完結性がしばしば指摘されるのは、その乱反射により両義性が生まれるためである。

先に見たように、ジョイスは『ダブリナーズ』の意図を、麻痺の中心であるように見えるダブリンを舞台に、そこにいる無関心な大衆に対し自国のモラル史の一章を示すことにあるとしていた。モラル史の一章を描くということは、モラル的に正しい位置を理解しているのは自分であり、正しい姿を示すことができるのは自分であるとの、傲慢といってもよい自信を示す。真理をかざすことで、自国の陥っている状態を糾弾し、窮状にある国を救う手当を与えること、それが『ダブリナーズ』という作品であったとするならば、それを描く作家は必然的に救世主的な英雄に押し上げられることになる。そのような窮状にありながら窮状に（あることすら）気がつかない（ふりをする）「無関心な大衆」と自身とを差別化し、それとは違う特権的な位置に自らを置くという意味で敵対的とならざるを得ないその立ち位置は、大衆からすれば受け入れられない。「無関心な大衆」は、そこから大衆を救い上げてくれる救世主を常に要請するのであろう。しかし、ジョイスがしたように、敵意

を振りかざす者がいたならば、それを無関心という形で受け止める、あるいは振り払うことで身を守るであろう。『ダブリナーズ』が出版に至るまでに長い時間を要したのは、そのような力学の一つの現れなのである。「無関心な大衆」は、自分たちに救済をもたらしてくれる英雄を求めるが、同時に真理の殉教者をも生み出すパラドックスを内包する<sup>(11)</sup>。『ダブリナーズ』の最初の短篇において、キリストの影を用いながら、単なる神父の死を、壮大な裏切りのドラマへと仕立て上げたジョイスは、「無関心な大衆」が生み出すパラドックスを痛いほど意識していた。意味は隠さねばならない。

## 注

1. ジョイスは一時医学を志していた。B. A. Waisbren と F. L. Walzl は、当時 paralysis と paresis が同じように使われていたことを指摘し、麻痺を梅毒による麻痺と考えている。
2. Bremen 55 nl; Jeri Johnson xxiv.
3. Walzl 375, 404; Tindall 13; Norris 16; Chadwick, 251-52; Groden and Mahaffey 30 参照。
4. “The Sisters”からの引用はノートンの決定版を用い、この短篇への言及は原則としてすべて決定版につけられた行数で行うものとする。
5. Leonard は、それゆえにコッターが神父のことをおもしろく思っていない点を指摘する(36-38)。
6. Ingersoll は少年が反応しているのは言葉の意味ではなく、音であることを指摘している(25)。“paralysis”, “gnomon”, “simony”の解釈については枚挙のいとまがないが、多くは、“paralysis”をDublinersの陥っている状態とし、“gnomon”をその不完全性のメタファーと考え、“simony”を精神的不純性と考える。“gnomon”を日時計の針の意で解釈(し、「姉妹たち」については、神父が少年に影を落とす様を示すと)するものもある(Walzl 400; San Juan, Jr 36)。
7. 神父と少年の間に同性愛的関係を読み取るものが多い。たとえば Brandabur 339. West は自慰との関係からの考察を試みている。
8. ジョイスは『ダブリナーズ』をDublinersに彼らがいる状態を見せつけるための“my nicely polished looking glass”と表現しているが、ここでいう鏡はそれとは異なる。(Letters, I, 64.)
9. James Joyce, *Dubliners*, ed. Jeri Johnson, Oxford: Oxford UP, 2000, p. 190. 『アイリッシュ・ホームステッド』版の「姉妹たち」についてはこの版を用いる。
10. Walzl 384, 409, 411. 神父と二人の姉妹を Lazarus と二人の姉妹と関連づける Spielberg (193) にも参照されたい。
11. Jeri Johnson も Oxford 版のテキストにつけたイントロダクションでジョイスによっていかに真実が重要であったかを示す文脈の中で、真理の殉教者としてのジョイスに言及している(vii-ix)。

### 引用文献

- Brandabur, Edward. "The Sisters", in *James Joyce, Dubliners, Text Criticism and Notes*, ed. Robert Scholes and A. Walton Litz. Harmondsworth: Penguin, 1976, 333-43.
- Bremen, Brian A. "He Was Too Scrupulous Always' A Re-Examination of Joyce's 'The Sisters.'" *JJQ* 22.1 (1984): 55-64.
- Chadwick, Joseph. "Silence in 'The Sisters.'" *JJQ* 21.3 (1984): 245-55.
- Groden, Michael and Vicki Mahaffey. "The Sisters," in *Collaborative Dubliners : Joyce in Dialogue*, ed. Vicki Mahaffey (Syracuse: Syracuse UP, 2012), 23-47.
- Ingersoll, Earl G. *Engendered Trope in Joyce's Dubliners*. Carbondale: Southern Illinois UP, 1996.
- Jackson, John Wyse and Bernarad McGinley. *James Joyce's Dubliners: An Annotated Edition*. London: Sinclair-Stevenson, 1993.
- Joyce, James. *Dubliners*. Ed. Jeri Johnson. Oxford: Oxford UP, 2000.
- Joyce, James. *Dubliners: Authoritative Text, Context, Criticism*. Ed. Margot Norris. New York: Norton, 2006.
- Joyce, James, *Letters of James Joyce*, I. Ed. Stuart Gilbert. London: Faber and Faber, 1957.
- Joyce, James, *Letters of James Joyce*, II. Ed. Richard Ellmann. New York: Viking, 1966.
- Lachtman, Howard. "The Magic-Lantern Business: James Joyce's Ecclesiastical Satire in *Dubliners*." *JJQ* 7.2 (1966): 82-92.
- Leonard, Garry, *Reading Dubliners Again: A Lacanian Perspective*. Syracuse: Syracuse UP, 1993.
- Norris, Margot, *Suspicious Readings of Joyce's Dubliners*. Philadelphia: U of Pennsylvania P, 2003.
- San Juan, Jr., Epifanio. *James Joyce and the Craft of Fiction: An Interpretation of Dubliners*. Associated UP, 1972.
- Senn, Fritz. "'He Was Too Scrupulous Always': Joyce's 'The Sisters.'" *JJQ* 2.2 (1965): 66-72.
- Spielberg, Peter. "'The Sisters': No Christ at Bethany." *JJQ* 3.3 (1966): 192-95.
- Tindall, W. Y. *A Reader's Guide to James Joyce*. 1959; Syracuse: Syracuse UP, 1995.
- Torchiana, Donald T. *Backgrounds for Joyce's Dubliners*. Boston: Allen and Unwin, 1986.
- Waisbren, Burton A., and Florence L. Walzl. "Paresis and the Priest: James Joyce's Symbolic Use of Syphilis in 'The Sisters.'" *Annals of Internal Medicine* 80 (1974): 758-62.
- Walzl, Florence L. "Joyce's 'The Sisters': A Development." *JJQ* 10.4 (1973): 375-421.
- West, Michael. "Old Cotter and the Enigma of Joyce's 'The Sisters,'" *Modern Philology* 67. 4 (1970): 370-72.